

早稲田大学大学院日本語教育研究科

2006年3月

博士論文審査報告書

論文題目 日本語教育における中上級漢字語彙教育の研究

申請者氏名 徳弘 康代 (とくひろ やすよ)

本論文は、日本語教育における中上級漢字教育を総合的に研究することによって、漢字語彙習得の新たな視点を提案し、日本語の漢字教育・語彙教育に貢献していくことを目的としている。本論文においては、漢字を含む語の総体を漢字語彙と定義し、漢字を一字以上含む語を、漢語、和語、混種語を問わず漢字語彙として扱っており、漢字を含む語彙の範囲を漢語に限定していない。これは日本語教育において漢字を含む語は、それが和語でも漢語でも、あるいは混種語であっても漢字を含むということにおいて同等であり、漢字を含むこと自体が問題となるからである。

第一章では、中上級学習者に有用な漢字語彙を選択し、それを学習しやすいように提示することを試みている。有用な語彙を、現実の社会でよく用いられ、なじみのある漢字語彙であることとらえ、選択の基本資料として『NTT データベースシリーズ日本語の語彙特性』第7巻(2000, 三省堂)の朝日新聞14年分(1985~1998)の単語341,771語の頻度のデータと、同書第1巻(1999, 三省堂)の単語の親密度のデータを用い、これをもとにして約15,000語の漢字語彙を選択している。日本の社会で目にする機会が多く、日本語を母語として使う人々にもなじみのある語を学習することは、実用性の高い語を習得することと言い換えることができる。これらを意味概念のまとまりで示すことにより、教材を作るときの使用語句の基準ともなりうる資料となり、教育現場での活用が期待できる。なお、章末には、1万5千語の「漢字語彙一覧表」が付せられており、日本語教育の語彙の提出順等を考慮する上で欠かせない有益な資料となるであろう。

第二章では文字として個々の漢字に着目し、調査研究した情報をもとに漢字学習のための資料となる教材を開発し、これによって漢字および漢字語彙の基礎的研究と教育の場での実践的な教材を結びつけている。日本語学習書における提出順、漢字を単独の文字として覚えることの非実用性を考慮に入れて、頻度と親密度とを統合した上で、中上級漢字語彙の選定を行っている。こうして得られた2100字が、『漢字2100』ということになる。このように調査研究の結果を教材化し応用することによって、漢字および漢字語彙の基礎的研究と実践的な教育の場を結びつけることが行われている。『漢字2100』は具体的な資料を作成した点で、評価できるが、漢字の筆順、部首、訓読みの索引等もあると、より実用的になるであろう。単漢字の頻度順の配列からどのようにすれば、語彙としてのまとまりを引き出して使用できるようになるか、使用者側の立場から検討し、使用案が示されることが期待される。

第三章では、日本語の漢字の発音の側面について、特に漢語に多い同音語と、それ

にモーラ音素の付いた類音語を取り上げ、統計的に調査研究している。モーラ音素の音節での高い出現率、単語アクセントへのそれらの有意な影響、そして、それらの大量の同音語を作る働きは、日本語の重要な特性である。このことから、日本語の同音語の性質やモーラ音素の影響についての統計的な分析結果を踏まえて編集した資料は、言語処理の基礎研究だけでなく、語学教育に有用なデータベースとなるであろう。日本語の音声の習得において、モーラ音素の聴取や発音が不完全で脱落した場合に、間違える可能性がある単語の候補を検索する表を作成し、本論文末に『モーラ音素脱落対表』として示している。表自体は、その作業量、資料の膨大さから、誠に貴重なものではあるが、それを日本語教育にどのように応用するか、具体的には示されていない点が惜まれる。あるいは、それを『漢字 2100』中に収める工夫があってもよかったようにも思われる。

第四章では、第一・二章で整備した漢字および漢字語彙の基礎資料を使って、どのように学習することが中上級学習者にとって効果的であるかを考え、心理学の諸分野のアイデアを応用しながらその具体的な習得法の研究が行われている。ここでは、人間の言語処理と記憶のシステムにより近い習得法は、より負担が少なく、記憶に残りやすく、かつ引き出しやすいものになるという仮説に基づいてそれを検証する実験を行っている。さらに、この結果を日本語の漢字語彙学習に生かすため、心理学諸分野のアイデアを漢字語彙教育へ応用することが試みられている。本章は、本論文の中心とも言うべき部分である。漢字の認知処理過程をモデル化し、それを漢字習得に応用しようとする。一つが「ニューラルネットワークを基にした漢字処理モデルの作成」であり、今一つが「アフォーダンス概念の導入」である。ニューラルネットワークもコネクショニズムもともに心理学の術語であり、そうしたものを直接漢字教育に用いることはできないが、脳の言語処理能力を漢字習得に応用しようとした典型的作業が「概念地図」の作成ということになる。この発想自体は、全くの独創というわけではないが、規模が大きいこと、客観的資料と心理学的理論のもとに作成されたものとして、日本語教育界において新しい試みである。「概念地図」は早稲田大学の日本語の授業に応用して、高い効果を挙げており、今後は「概念地図をどのように使うか（独習用・ペア練習用など）、その手法によってどのように漢字が語彙として定着するかを調査できるような方向で研究が深化することが望まれる。

なお、いくつかの点で課題が残されている。漢字教育は語彙教育であるという前提

で研究が行われているが、漢字教育と語彙教育との関係の検討がなされていないこと、中上級段階における語彙教育は、学習目的に沿って指導内容が分化していく段階だが、漢字語彙の資料は、留学生を対象に作成されているものの、新聞記事のデータと親密度のデータを統合したものであり、学習目的との関連が弱いこと、また、専門教育に入る前の段階との説明があったが、現在は専門との橋渡しの時期を従来よりも早め、初級からでも行おうという動きがあるが、その点に触れていないことなどである。しかしながら、これらは、執筆者の将来の研究に期待されるところであろう。

全体を通して、抽象度の高い優れた論文であり、次の諸点で、日本語教育における漢字指導の進展に貢献するものと思われる。(1) 日本語教育の漢字教育では先行例のない 15,000 語という大量の漢字語彙の選定を行った。またそれに学習指標値を付け、さらに概念分類できるように整備したことにより、教材として利用することが容易になる。(2) 第一章で選択した語彙の具体的提示法の一つとして学習資料を開発し、単漢字の提出順についても考察した。言語の基礎的研究と現場をつなぐ日本語教育研究にふさわしい成果を得ている。(3) 同音語を調査し、同音語の数と同音語組内の語数との関係を数式化した。また、モーラ音素がアクセントに影響を与えていることについて、統計的調査により明らかにした。この調査で得たモーラ音素の有無による同音語・類音語を対にして示した表は、日本語教育において作成されたことがなく、今後特に、漢語の発音練習のための基礎資料として大いに役立つものとなる。(4) 漢字とその語彙についての学習法への心理学理論の応用が試みられた。心理学の諸分野には学習・記憶・再生のメカニズムを解明しようとする研究が多くあるが、それらを大量の漢字語彙の教育に応用しようとする研究は本論文が先鋒に位置するものである。

以上を総合し、本論文が日本語教育学における博士学位論文として認められるものであることを、ここに報告する。

主査 鈴木義昭 (大学院日本語教育研究科教授)

副査 川口義一 (大学院日本語教育研究科教授)

副査 小宮千鶴子 (大学院日本語教育研究科教授)